ヤマトタケル

澤井理乃

第一章　誕生と旅立ち

ヤマトタケルは古事記中巻の景行天皇の御代に登場し、後に「悲劇の英雄」として人々の記憶に残る存在となる人物である。古事記において景行天皇代の記述はほぼヤマトタケルの物語となっていて、景行天皇自身の功績は記されていない。ヤマトタケルは景行天皇と針間の伊那毘能大郎女との間に第三子として誕生した。幼名は小碓命である。景行天皇の子供は全部で八十人と記されているが、その中で三人の子供が太子の名を負い、皇位継承権を手にした。その三人の皇子の中に「倭建命」の名が挙げられているのである。

これは異例なことであった。系譜説明部分においては前に掲げた皇子女の名と照応させながら天皇となった皇子をはじめ、主要な皇子や皇女をあげていく古事記の記述法の中で、名が前に掲げたものと照応していないのである。そして「太子」という言葉も、神武天皇から第十二代目にあたる景行天皇代に初めて使用された言葉であった。それまでは天皇と妻の間に生まれた皇子女の名を列挙し、その中からさらに一人の皇子の名を挙げて次代天皇となったことを書き記すという表現方法であったが、景行天皇代では三人の皇子を太子とし、複数の皇位継承者がいたということをわざわざ示しているのである。このように、景行天皇代のヤマトタケルに関係する記述には不思議な点が多い。それはヤマトタケルという人物には、生来から天皇となるだけの資質を持っていたということをほのめかすための重要な暗号だったのである。

ヤマトタケルが天皇となる資格と器を持っていたとするには、古代の皇位継承方法からも伺うことができる。古代皇位継承方法について以下のような文献があるので参照したい。

皇統譜について、これまでわが国古代の相続の仕方は、末子相続であるといわれてきた。実際『古事記』や『日本書紀』を一見したところでは、兄たちをさしおいて、末子が相続しているようにみえる。そのため、そう信じられてきたのであるが、よく調べてみると、弟ではあっても、必ず第二子にかぎられている事実がみとめられるのである。

（鳥越憲三郎『神々と天皇の間』一九七〇年・朝日新聞社・六三頁）

鳥越氏によると、神武天皇から応神天皇までの間の皇位継承の仕方には「第二子」という法則があったようだ。実際に系図を調べてみると、第一子しか男子が生まれていなかった場合は第一子が皇位を継ぎ、第二子でなかったとしても何らかの理由により実質的な第二子となったものが皇位を継いでいるということが判明した。ヤマトタケルは実の兄であった大碓命を、天皇に従わなかったとして幼少の頃に殺害してしまう。その時点で実質的な第二子となり、皇位継承者としての正統な立場を持っていたということになるのである。

このヤマトタケルの天皇としての資質が非のないものであったという事実は、後のヤマトタケルにとって非常に重要な前提になると見られる。ヤマトタケルという人物は、古事記の中巻の終わりに英雄的存在として登場する。その登場理由に対する伏線的部分でもあるのが、ヤマトタケルにまつわる皇位継承権の問題であった。

ヤマトタケルには常に「異質」や「非凡」という言葉が付きまとう。それは兄殺しや熊曾建討伐、出雲建討伐の場面で顕著に示されている。先述したように、小碓命（幼名）は天皇の言葉に従わなかった兄の大碓命の四肢をもぎ取り、川に投げ捨てるという残忍な方法で殺害した。この時小碓命はまだ十三、四歳の少年である。天皇と小碓命の会話の解釈の相違から起きた事件であったが、殺害方法の異常さと、それを一人でやってのけた非尋常さから、ヤマトタケルの潜在的な武力の高さと、その力をコントロールすることのできない幼稚さを窺うことができる。兄殺しの一件で景行天皇から恐れられたヤマトタケルは西の熊曾建の平定に向かうことになる。名目上は天皇の命を受けて西征に向かう将軍のようではあるが、その真意は突出しすぎたヤマトタケルの力を近くに置いておくことの危険性を兄殺しの一件で悟った景行天皇による、秩序からの追放にあった。

ヤマトタケルの非凡さは熊曾建討伐の場面でも見ることができる。熊曾建を討伐するために、ヤマトタケルは叔母である倭比売命のもとへ行き、衣装を借りる。到着した熊曾建の地で、ヤマトタケルは熊曾建の新室完成の祝宴が行われるまで、熊曾建の家の周りを三重に囲った軍勢の中に混じり、内部を観察するのである。これは

熊曾建を討伐するための情報収集ともいえる行動であり、ヤマトタケルの用意周到な一面が見られる。そして宴会が始まるとヤマトタケルは倭比売命から借りた衣装に着替え少女に変装して、その宴に紛れ込む。その美しさに魅入られた熊曾建兄弟はヤマトタケルを呼び寄せ、自分たちの間に座らせる。ヤマトタケルはこうして討伐に一番有利な場所を労せずして手に入れるのである。女に変装するという場面は、女装しても気づかれないというヤマトタケルの身体的未熟さを象徴している部分でもあり、まだ成人男性になりきれていない中性的なイメージを与えるものでもある。またそこに、自分の特徴を最大限に利用するヤマトタケルの知能の高さも垣間見ることができる。そして、その身体的未熟さとは裏腹に、武力に長けた大の男を二人も簡単に殺害してしまうというヤマトタケルの力の強さとのギャップが、ヤマトタケルの突出した能力を印象付けることになる。これは出雲建の話でも同様である。

熊曾建討伐に続く出雲建討伐の話は、出雲建の刀を木の刀とすり替え、騙し討つという内容である。ここではヤマトタケルの知力の高さに加え、騙すことを卑怯なことと思わず、相手を素早く討ち取る手段として好んで使い、さらに騙された相手に対して嘲笑の歌を歌うという、善悪の区別がつかないほどまだ精神的に幼い子どもであったということを示している。幼いながらも突出した武力と知力をその身に秘めたヤマトタケルの非凡さは、西征物語を通して何度も強調されており、ヤマトタケルが平凡な存在から遠く切り離された存在であったということを強く印象づけている。その意味は最後の章で触れることにしたい。

再び熊曾建討伐の話に戻るが、熊曾建兄を殺害した後に熊曾建弟を殺そうとした時、ヤマトタケルはしばし熊曾建弟と会話をする。天皇の代わりとして倭という国を背負っての使命を受けているという自負のあるヤマトタケルは小碓命ではなく「倭男倶那王（倭の若い男）」と名乗る。少年の正体を知った熊曾建弟は、敗北を認め、小碓命を賞賛して名を献上するのである。名は体を表し、その人物の存在そのものを指すものだった。名を献上するということは、相手に自分の能力のすべてを渡すことになる。そして献上された側は、相手の能力を得てさらに強くなっていく。名を献上すると、自分を証明するものは何もなくなってしまい、消滅してゆくのである。敗者にとっては最も屈辱的なことだった。逆に言えば、勝者は敗者から力を奪い取ることができるのである。小碓命は熊曾建から「建」という名を奪いとった。「建」は、主に武力に長けた者や荒々しさ・猛々しさ・雄々しさを指す言葉であり、勇猛な人物に使われる言葉で、古事記では「建速須佐之男命（スサノヲ）」や「大長谷若建命（雄略天皇）」の名などに見ることができる。つまり小碓命は熊曾

建の武力を奪い取りさらに強大な力を得て「倭建命」となったのである。

この力の譲渡を「献上」という形式で行ったのは、ヤマトタケルがただの乱暴者として力を振ったわけではなく、支配と服従の関係において熊曾建がヤマトタケルを通して天皇の支配下におかれたということを示す。こうしてヤマトタケルはその突出した力でもって天皇の秩序を広めてゆく。まるでもう一人天皇が存在しているかの如く、ヤマトタケルはその存在感を際立たせてゆくのである。ヤマトタケルは言うならば景行天皇とは違う性質を持って誕生したもう一人の王であった。しかし違う性質を持つがゆえに同じ世界で共存することはできなかった。それは原始的な支配の在り方と、それを変えていこうとする力との戦いでもあった。勝負は常に勝者が「正」となる。その結果が、西征物語に続く東征物語の中で明らかにされるのである。

第二章　試練と成長

西征を終えたヤマトタケルが帰郷すると、景行天皇は休む間もなくヤマトタケルを東征に赴かせた。東征物語はヤマトタケルの生涯の大半を占める物語である。ヤマトタケルが東征で築いた秩序はすべて景行天皇の御代の繁栄に収斂されるが、その一方でヤマトタケルは大和に再び帰ることも叶わず辺境の地で果てていく運命を辿るのである。その旅路に大きく影響を与えたのが、三人の女性の存在であった。伊勢の斎宮である叔母の倭比売命、ヤマトタケルの代わりに海神の贄となって海を鎮めた弟橘比売命、そして尾張の美夜受比売である。

倭比売命は伊勢の斎宮であり、巫女であったことから神の力を得る者であり、ヤマトタケルと神を繋ぐ仲介者であった。倭比売命が与えた草那芸剣によってヤマトタケルは常に呪力を纏い、加護を受けていた。このことは人代記に移ってもなお神威は深くその根底にあるということを示していると同時に、ヤマトタケルが呪術的要素の色濃い古代社会に属する存在であったこともほのめかしている。霊力の媒体であった草那芸剣を手放した時、ヤマトタケルを加護する力は無くなり、ヤマトタケルを滅ぼすことになる。

一方、走水海でヤマトタケルの代わりに荒ぶる海原に身を投げ、海神を鎮めた弟橘比売命も巫女的存在であった。弟橘比売命が海に入るということは海神の嫁になるという意味合いが含まれていた。霊力を含む橘の名前をその身に宿す弟橘比売命が、常世に続く海の中に身を投じ、その海を支配する神に身を捧げた結果、海神の力は抑えられ、ヤマトタケルの旅は続いてゆく。ヤマトタケルは弟橘比売命を通して海神の力を制したことになり、その力が不変なもので

あるようにとの加護も得られたわけである。

尾張の美夜受比売はヤマトタケルの二度の訪問を経て結婚した女性である。この美夜受比売との結婚には、尾張国がヤマトタケルの支配下に加わるという意味がこめられていた。それだけではなく、結婚した時美夜受比売が生理中であったことから、血の呪力によって一時的な巫女的性質を得て、ヤマトタケルに呪力を間接的に与える力の増幅者としての役目も担っていたのだった。この三人の女性の助力を受け、ヤマトタケルは東征を着実に進めていくのである。

美夜受比売との結婚後、ヤマトタケルは美夜受比売のもとに加護の媒体であった草那芸剣を置き、伊吹山の神を退治しに行く。しかし神の霊力の媒体を手放したヤマトタケルは、神を素手で討ち取ろうとしたその傲慢さも関係し、伊吹山の神の正体を見誤り、敗北する。その時にヤマトタケルは病を患うが、清水の浄化力によって一時的に気を取り直す。しかし病は時を経るごとに重くなっていき、ついに能煩野で最期を迎えるのである。

ヤマトタケルは東征において五回の霊力・呪力の補給をうけていた。一度目の補給は東征出発の際に天皇から授かった柊の矛である。しかしこの柊の矛は東征物語の中で一度も出てこない。そして二度目が伊勢神宮で倭比売命より霊剣と火打石を授かった時で、火打ち石は相模国で失うが、霊剣は継続して補給の憑代となる。三度目の補給は弟橘比売命の入水の時で、弟橘比売命を通して海神の加護を受けた。四度目は美夜受比売との結婚の時で血の呪力による生命力と呪力を得ることができた。そして五度目が泉での水の呪力による生命力の回復と体内浄化である。このようにヤマトタケルにとって呪力や霊力は切り離すことのできない力であった。ヤマトタケルには常に神秘的な霊力と呪力が備わっていた。それにヤマトタケルが生来もつ高い知力と武力が加わりヤマトタケルの心・技・体は常に安定し続けてきたのである。ヤマトタケルは不思議な力をその動力源とした、古代の中の更なる古代性に属する存在であったのである。

その後能煩野で病が深刻になったヤマトタケルは、死の間際に次の三首を詠んだ。

倭は　国の真秀ろば　たたなずく　青垣　山籠れる　倭し麗し（記三〇）

命の　全けむ人は　畳薦　平群の山の　熊白檮が葉を　髻華に挿せ　その子（同三一）

愛しけやし　我家の方よ　雲居立ち来も（同三二）

前の二首が思国歌であり、最後の一首が片歌とされる。古事記でヤマトタケルが望郷の思いをこめて歌ったこれらの歌は、日本書紀において景行天皇の歌として記されている歌でもある。この三首は国見儀礼という天皇が土地の支配を行なう際の儀礼において詠む

歌の法則にのっとっており、ヤマトタケルの天皇性をより強めようとした意図が窺える。三人の女性の援助に含まれる意味も合わせて、このように東征物語では全体に渡ってヤマトタケルの天皇としての性質を示唆しようとする意図がちりばめられていた。人々に「ヤマトタケル＝もう一人の天皇」という意識を強く印象付け、そのヤマトタケルの物語を死で終えることで、古事記は完璧な天皇中心の秩序世界を完成させようとしたのである。またその意図に、先述したヤマトタケルの内なる古代性が大きく関係してくるのである。そのことについては第三章で触れることにしたい。

さて、能煩野で没したヤマトタケルは、死後その姿を白鳥に変え、空に飛翔する。白鳥となったヤマトタケルはゆかりの地に何箇所か留まるが、大和へは降りることなくさらに天高く飛翔してゆくのである。古事記の中では徹底してヤマトタケルと大和の間に深い溝を感じさせている。それは天皇の世界からの徹底した線引きがされていたからである。そして天皇とヤマトタケルが表裏一体のものでありながら、まったく別の性質をもった相容れることの出来ない人物であるということを示すためであったと考えられる。魂だけとなったヤマトタケルは、天皇の世界には留まらず、天高く神の世界へと飛び立っていった。それは地上でのヤマトタケルの役目が完全に終了し、もうそこには存在意義がなくなったということを暗に示す意図もあったのである。

では、なぜヤマトタケルの物語は主人公の死という結末で終えなければならなかったのか、ヤマトタケルと景行天皇が表裏一体でありながら全く別の性質をもっているとはどういうことか、またヤマトタケルに天皇的性格を強く印象付けたことでどんな意味が生まれたのか、ヤマトタケルの内なる古代性はなぜ示されたのか、なぜ景行天皇代にヤマトタケルの物語が語られたのか、古事記はヤマトタケルに何を描き出していたのか等の疑問について考察しながら、ヤマトタケルは果たして本当に「悲劇の英雄」であったのかという点を考えていきたい。

第三章　ヤマトタケル説話の位置づけ

ヤマトタケルはなぜ死ななければならなかったのか。その理由は、ヤマトタケルが古事記に登場した意味に直結する。ヤマトタケルは強すぎる力を持っていたために実の父である景行天皇から疎まれ、西に東に遠征を命じられ体のよい厄介払いのような扱いをうけるが、その結果、諸国の天皇に従わぬ者たちは一掃され、天皇の秩序は諸国に浸透していくことができたのだった。ヤマトタケルの物語は古事記の中巻の最後の方に書かれている話である。古事記中巻が持つテーマは、天皇と世界のもととなる神話的な部分の上巻をうけて、

天皇が中心となる世界の成り立ちを語るところにあった。神武天皇から応神天皇までの間で、天皇の秩序の世界が確立されていき、下巻では完成された天皇の天下のもとで話が進行していくのである。ヤマトタケルはその中巻最後の締めを担っている人物であった。そのヤマトタケルの死は、古事記が目指した天皇中心の世界作りを完成させるための必要不可欠なプロセスであった。

天皇の目指した秩序世界、それは血で血を洗い、力ですべてをねじふせるような世界ではなかった。あくまで「言向（ことむ）けて「和平（やわ）」すことが目指すものだったのである。ヤマトタケルの物語は、いわば旧古代支配体制と新古代支配体制の対立の物語だった。旧古代体制の王であったのがヤマトタケルであり、新体制の王が景行天皇である。もう少し分かりやすく言い換えると、ヤマトタケルは猛々しい武力や神秘的な霊力・呪力、神通力でもって己の力で支配を勝ち取るような「古代の中の古代」に生きる存在であり、またその世界を象徴する王であった。しかし古事記が目指す究極の天皇像は「古代の中の近代」に生きる天皇である。既存の神々を統括し、なぎ払い、新しく耕してゆくのがその役目であったということである。神武天皇より続いた天下統制の終着点は、いかに旧古代体制性を新体制の中に吸収するかというところにかかっていた。しかし、旧体制を制するためには、旧体制に見られるような力ずくの一面がなくてはならないのも事実である。そこで新たな体制による王権の確立に協力しながらも滅んでゆく古代の中のさらなる古代性を一人の人物に描き出した。それがヤマトタケルであった。ヤマトタケルは、そのような王権を確立してゆくためには必要不可欠な、しかし新しい秩序を得て持続していくべき王権には不要な、王権や統制の「陰」または「負」の部分を背負った人物であり、それゆえに古事記の中では死んでもらわねば困る存在だったのである。勝負は常に勝った方が正しいと認識される。ヤマトタケルは大和に帰ることなく果てゆく。霊力や呪力を手放した瞬間に滅びの道を辿るヤマトタケルは、否定されてゆく古代性の未来を象徴していた。

ヤマトタケルの役目は、東征を終え、大八島国に天皇の望む秩序をもたらした時点で終えた。ヤマトタケルが果てることで中巻のテーマである天皇と中心とした新しい世界作りは完結をみるのである。その死とともに、天皇の「秩序」としては語れない部分、新しい王権体制には必要のない部分の一面を、ヤマトタケルの強大な力もしくは異端性という表し方で消し去ったのである。なぜなら西征に成功し、さらに東征に成功し、無事に大和に帰ったところで結局ヤマトタケルは景行天皇と共存できない支配者同士であったためである。そして、そこにヤマトタケルを「悲劇の英雄」として表現した意図も見えてくるのである。

「悲劇の英雄」と言われたヤマトタケルの悲劇的な部分はどのような点から言えるのだろうか。まず、天皇のための兄殺しによって追放のような扱いを受けてしまうところは、彼の兄説得の方法が、天皇の思惑とはくい違ったという奇妙なずれから生じるもので、そこに哀れさを感じさせる。その後、西征から戻ってすぐに東征に命じられるヤマトタケルの姿は、親に愛されない子の悲しさを漂わせていて、読む者の胸を痛ませる。そして最大の悲劇は、やはり大和に帰り着くことができずに、旅のさなかで孤独に死んでゆくヤマトタケルの最期だろう。終わりよければ全て良しというが、終わりが良くないヤマトタケルはその生涯すべてが悲劇的なものに見えてしまうのである。古事記のヤマトタケルが悲劇の英雄だとされるのは読み手が感じる心理的感傷からくるものであるが、私には、古事記が、ヤマトタケルを悲劇的な存在として見せたかったのではないかと思えて仕方がないのである。ヤマトタケルが一連の物語を通して悲劇的に描かれるのは、どちらにせよヤマトタケルの存在を認めてしまうわけにはいかなかった古事記の、巧みな心理操作であったと思われる。人々の心を捉える悲劇的な物語の中に真意を柔らかく隠して、ヤマトタケルの物語に秘められた王権の「負」や「陰」の部分を隠蔽したのではないだろうか。しかし、ヤマトタケルを悲劇の英雄という姿のままに古事記の説話の中に置くことには、非常に抵抗が残る。というのは、ヤマトタケルは「悲劇の英雄」という言葉で括って終わりにしてしまうには、重要な役目を背負いすぎていたからである。それがこの章の初めで述べた、天皇とヤマトタケルに象徴される二つの対立的な支配論理であった。

根本からして違うものは、理解し合えない。しかしヤマトタケルと天皇はそれでいいのである。ヤマトタケルが古代的な暴力の王権を、天皇が近代的な秩序の王権を、対になる世界をそれぞれを担うことで一応の釣り合いはとれるのである。本能が存在しない上での理性など存在しない。本能的なもの、原始的なものはすべての起源なのだ。しかし先ほどの繰り返しになるが、秩序にとってそれは邪魔になり、隠蔽されなければならないので、ヤマトタケルは死なせられるのである。

ヤマトタケルは言うならば必要悪だった。悪役がいない英雄劇がなんの面白みも持たないように、天皇にとってはヤマトタケルが悪であり、ヤマトタケルには天皇が悪であることでよりいっそうどちらかが負けた時、その後の世界は重いものになるのである。つまりヤマトタケルの物語でいうならば、神武天皇から続いた平定物語がヤマトタケルに受け継がれ、最後の最後で景行天皇から追放されたヤマトタケルが果てることで、それを代償として実現される天皇の秩序世界が、大きな重い意義を担うのである。

ヤマトタケルは確かに天皇たる存在であった。景行天皇と背中合わせに反対の方向を見据えつつ、三百六十度の視野で大八島国を知らす存在だったのである。ヤマトタケルは本来決して悲劇の英雄ではない。ヤマトタケルが負の世界を背負わなければ天皇の秩序世界は完成されなかったのだ。またヤマトタケルは、最も古代人的な率直さ、簡潔さ、猛々しさ、残酷さを持ち合わせていた。それは理性と秩序による天皇の世界を築くために必要なものであり、消そうとしても人間の本能の中に根付いているものでもあった。そのため須佐之男命や神武天皇、雄略天皇など、ヤマトタケルとの共通点が多い人物が古事記全編を通して登場しているのである。ヤマトタケルが中巻の最後に登場したわけは、それが古代性からまさに脱皮して新しく孵化しようとしていた境目だからであり、古事記の中で最も注目すべきターニングポイントでもあった。神から人間へと移り、さらに世界の質が変わろうとしている時に、蛹の役目を果たしたヤマトタケルに「悲劇の英雄」という名は本来はふさわしくない。ヤマトタケルは決して「悲劇の英雄」ではないのである。ヤマトタケルこそが天皇・王権の影の真実であり、秩序の礎であり、目指した世界を具現化した古事記のそれまでの平定物語の集約であったと私は思うのである。

使用テキスト

・山口佳紀、神野志隆光『新編日本古典文学全集1　古事記』一九九七年六月・小学館

・坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋『日本書紀（二）』（文庫版）一九九四年十月・岩波書店

主な参考文献

・上田正昭『日本武尊』一九六〇年七月・吉川弘文館

・鳥越憲三郎『神々と天皇の間―大和朝廷成立の前夜』一九七〇年五月・朝日新聞社

・吉井巌『ヤマトタケル』一九七七年九月・學生社

・守屋俊彦『ヤマトタケル伝承序説』一九八八年六月・和泉書院

・都倉義孝『古事記　古代王権の語りの仕組み』一九九五年八月・有精堂出版

・石渡信一郎『ヤマトタケル伝説と日本古代国家』一九九八年九月・三一書房

（二〇〇五年　卒業）